

『欲情螺旋』

著:水戸 泉

ill: 葛西リカコ

享、と慎治が呼び終える前に、享はつつかたとベッドに歩み寄り、キョウイチの胸(むな)倉(ぐら)を掴み上げた。

そのまま拳(こぶし)を、キョウイチの頬に叩きこむ。

「よせ！」

これもまた、慎治が止める羽目になる。享はきっと、自分に無礼なことをしたキョウイチのことを怒っているのだらうと慎治は信じていた。享は『親思い』の子だ。きっとそうであろう、と。

「やめろ！ キョウイチはまだ『子供』だ！」

体の大きさは享と同じでも、まだキョウイチは享の知能には追いついていない。善悪の区別さえ曖昧なのだ。

そんな真っ新の時期に暴力を受けたら、暴力を『学習』してしまう。慎治はそのことを怖れていた。

しかし享は聞き入れない。冷ややかな、氷の眸で慎治を睨む。

「許すの？ 慎治さん」

「キョウイチを叱るのは私の役目だ！」

秩序は保たれないといけない。感情的に怒りをぶつけるのと、節度を持って叱ることは決定的に違う。慎治は教育学の専門家ではないが、その程度のことは常識として身につけていた。が、この世には常識などまるで役に立たない局面があることを、彼は未だ完全には認めていなかった。

「叱る？」

皮肉っぽく口元を歪(ゆが)めて、享が嗤(わら)った。

「押し倒されて、キスされて、勃起した人が相手を叱るなんて、できるの？」

「な……」

あまりの言われように、慎治は今度こそ本気で激怒した。享の胸元を掴み上げ、殴りはしないものの、怒鳴りつけた。

「なんてことを言うんだ！ 謝罪しろ！」

「ごめん。いくらでも謝るよ」

決して侮(あなど)った口調ではなく、まっすぐに慎治の目を見て、享は言った。そのまっすぐさに、慎治は怯む。

胸倉を掴んでいる慎治の手を、享は掴んで自分の唇に引き寄せた。

「だから俺にも、キスさせてよ」

再び慎治は、凍りつく。

膝が震える。

自分でも情けないほど、恐怖する。

この部屋に二人いる、喬一のクローンに。

慎治の恐怖を嫌悪と解釈したのか。

享の口調に、悲しみが混じる。

「でなきゃ不公平だろ」

「馬鹿者が！ 何を言ってるんだ！」

慎治はそれを、怒っているふりをして拒絶するしか出来なかった。本当は、怒っているのではない。

怖いのだ。

悪夢が再び、自分の身に降り掛かることが。

「二人とも、もう寝ろ。大人をからかうんじゃない」

極力冷静さを保ち、慎治は二人を寝室から追いやった。

キョウイチは「ごめんなさい」と素直に謝って出て行ったが、享のほうは部屋から出て行く刹那、慎治を振り返って言った。

「忘れないよ」

慎治は目を逸(そ)らせない。

享があまりにも真っ直ぐに、自分を見詰めるせいで。

「あんたがこいつにキスされてたこと、俺は絶対、忘れないから」

「……寝なさい」

それだけ言うのが精一杯で、慎治は扉を閉めた。

まるで、呪縛のような言葉だった。



翌朝を、慎治は一(いっ)睡(すい)もできずに迎えた。あんなことがあった後で、眠れるはずもない。

鉛を呑みこんだような重い気分で、それでもなんとか自分を奮(ふる)い立たせ、慎治はリビングに向かう。

ドアを開けた途端、慎治を出迎えたのはいつもと変わらぬ享の明るい声だった。

「おはよう、慎治さん」

温かな朝食の香りとともに、声が飛ぶ。慎治は一瞬、面食らった。昨夜の気まずさは、慎治の中には未だ色濃く蓄(ちく)積(せき)されていたからだ。

しかし、享もキョウイチも、変わらぬ笑顔のままそこに居る。享はエプロンをつけて食事を並べるのに勤(いそ)しみ、キョウイチは紅茶を飲んで居た。

慎治が何かを言い出す前に、享は先手を打ってきた。エプロンを外した享は、先手を打つように謝罪した。

「昨夜はごめん。俺ちょっと、悪のりしすぎたよ」

「あ、ああ」

その口振りに、嘘の匂いはなかった。享は本当に反省している。慎治の耳にはそういうふうには聞こえた。

ならば慎治には『許す』他に選択肢はない。

「もういい。気にしてない。お前も早く食べて、大学に行きなさい」

「うん。そうする」

慎治はキョウイチにも話しかけた。

「キョウイチも、気にすることはないんだぞ。ただし二度とあんな『悪ふざけ』はするな」

「はい」

彼もまた素直に頷く。

話はそれで終わったのだと、ただ慎治だけが信じていた。

慎治は安心して、享の淹れてくれた紅茶を口に、玄米パンとトマト味のスープも平らげる。それは享の得意料理で、いつもと変わらず美味だった。

さてそろそろ支度を整えて出勤するかと、椅子から立ち上がった瞬間。

「……………!？」

慎治は、猛(もう)烈(れつ)な眠気に襲われ、そのまま椅子から転げ落ちた。

「大丈夫？ 慎治さん」

すかさず享が、手を差し伸べる。その大きな手に支えられながらも、慎治の膝は自分自身の肉体を支えることができない。

「あ、い、や……………」

「今日は休んだほうがいいよ。酷い顔色だ」

突然、足が宙に浮く。

享が、慎治を横抱きしたのだ。そんなことはしなくていいと言いたいが、慎治はもはや喉も痺(しび)れ、声が出ない。

寝室に運ばれたところまでは意識を維持できた。

しかし、それ以降、次に目が覚めるまでの間のことを、慎治は記憶に残せなかった。意識を失ったせいだ。

「おやすみ、慎治さん」

最後に耳にしたのは、享の甘い声だった。キョウイチはその時、何をしていたのか。慎治はそこまで気を回すゆとりがなかった。

次に目を覚ました時、室内は暗かった。体温で温められたシーツが心地よく肌に触れている。深く眠ったせいで、ようやく全身の痺れが取れて、慎治は上体を起き上がらせようとした。

が、手も足も動かない。

(なん、だ……………)

本文 p96～102 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>